

「初めての手術」

「網膜剥離ですね。うちでは手術ができないので、○大病院へ今から行ってください。」近所の眼科医にそう告げられ、○大病院へいくと、すぐに手術の説明。そして入院へ。受診からわずか4時間で手術と入院日程が決定したのでした。

これが噂のインフォームドコンセント（説明と同意）というものか……。 「一度持ち帰って検討します」なんて雰囲気はありません。日頃、金融商品を扱う者には到底理解できないスピードで物事が進みます。近しいドクターに相談する時間も与えられることなく、私の人生初手術が決まったのです。

そもそも、ほんの少し目がかすむ程度で受診しただけなのに、手術まで宣告されて、しばし茫然としました。しかも入院初日に予定されていた手術は開始時間が3時間以上も遅れます。「ひょっとして、前の手術で何かトラブルでもあったのでは？」余計な想像ばかりが膨らみます。

自分が解剖されるカエルのようにも思えてきましたが、大学病院の手術室に入ってみると、テレビドラマで見ていたよりも広く迫力があります。大勢の医療スタッフがいる中、車イスで運ばれる様はまるでドラマの主人公になったような気分に(笑)。

手術自体は麻酔のお陰で痛みもなく、眼を手術される精神的な疲労のみで無事終了。救いだったのは、家族や看護師さんたちの明るい対応。支えてくれる人の存在の大きさを感じました。

術後は入院直前に慌てて契約した本の朗読アプリが大活躍します。9日間の入院中に、なんと9冊もの本を「聴了」。「俺たちの箱根駅伝」に大感動。眼が見えなければ聞けば良いと視点を考えたのが、大正解。退屈とは無縁の入院生活でした。

唯一、気がかりだった仕事も入院中、何の問題も生じなかったのは驚きです。その分、後から色々ありましたけど、目には見えない不思議な力に守られていたんでしょうね。

そして今回、病気になって、当たり前だと思っていた日常が、実はたくさんの奇跡の上に成り立っていることに気づきます。読み書き。距離感をつかむこと。自由に出かけること。全て両目があつてのことです。また、いつか両目が開かなくなることも、少しだけリアルに感じた入院でした。

眼の病気が意味するもの。人生そんなに長くないんだから、もっと自分を労われよ、そして、「今」を生きろというサインだったのかもしれない。

他人を見る目、自分を見る目、日常を見る目を、少し変えてみます。